

8) 白血球による内皮依存性血管弛緩作用における接着分子の関与

木下 秀則・福田 悟 (新潟大学
麻酔学教室)

内皮依存性弛緩作用において一酸化窒素が主要な役割を果たしているといわれるイヌ冠動脈では白血球-血管内皮の相互作用において接着分子が重要な役割を果たしているといわれている。今回ブタ冠動脈においても接着分子が主要経路として関与しているかを検討した。またケタミンは内皮依存性弛緩作用を増強するが、その機序としても接着分子が関与しているか、セレクチンのアンタゴニストであるフコイジンを用いて検討した。

フコイジンで血管標本を処置しても内皮依存性弛緩作用は抑制されなかったことから接着分子の関与は否定的と考えられた。またケタミンによる初期の弛緩は抑制されなかったが、後期弛緩作用は抑制された。この機序については不明であり今後の課題である。

9) マスタードオイルにより誘発される咀嚼筋筋電図活動におよぼす bicuculline の影響について

瀬尾 憲司・染矢 源治 (新潟大学歯学部附
属病院歯科麻酔科)

三叉神経系の内因性下降性鎮痛機構における GABA_A 受容体の関与について検討を行った。実験には SD 系ラットを用い、酸素・笑気・ハロセンにて麻酔を維持し、咬筋と顎二腹筋より筋電図活動を連続的に記録した。マスタードオイルを顎関節に注入する前に延髄背側面三叉神経脊髄路核尾側亜核の直上に GABA_A 受容体拮抗薬である bicuculline を 1 μg 投与すると、マスタードオイルに対して反射性に生じる咀嚼筋活動は増加した。またマスタードオイルの注入30分後に bicuculline 1 μg を投与すると、一度収束した筋電図活動は再び増加した。したがって、GABA_A は三叉神経系脊髄路核尾側亜核において痛覚伝達抑制効果を有することが示唆された。

10) 気管支喘息を合併した帯状疱疹後神経痛患者の治療経験

和栗 紀子・早津 恵子 (新潟大学
麻酔学教室)

症例は71歳、男性。気管支喘息発作のステロイド治療中に右上腕、背部の帯状疱疹が出現した。帯状疱疹後神

経痛に対して持続硬膜ブロック (T2/3) 及びボルタレン坐薬などを施行したところ、喘息発作の増悪を来した。硬膜外ブロック及びボルタレン坐薬が喘息発作の増悪因子と判断し、両者を中止した。以後速やかに喘息発作は軽快した。本症例においてはその臨床経過より硬膜外ブロック及びボルタレン坐薬が喘息発作増悪に関与したと考えられ、文献的に両者と喘息発作の関連を考察した。さらに当院において手術を施行された喘息患者 264 人について麻酔の種類と喘息発作の頻度を調査し、その結果を含めて報告した。

11) 硬膜外・クモ膜下微小内視鏡によって疼痛軽減を得た症例

早津 恵子・富田美佐緒 (新潟大学
西巻 浩伸・下地 恒毅 (麻酔学教室)

当教室では、協同開発した微小内視鏡を臨床応用し、1987年以來、硬膜外クモ膜下を内視し、種々の疾患の診断に応用し、治療の可能性を検討してきた。1987年4月から1997年2月までに硬膜外・クモ膜下内視鏡を施行した41例を対象として診断と治療に関する有用性を検討した。

41例中23例にクモ膜炎様所見がみられた。癒着や嚢包、結節状隆起などが認められた症例もあった。興味あることに、内視鏡検査後に疼痛の軽快をみたものが6例あった。その機序として、クモ膜などの癒着により圧迫・牽引された脊髄や神経根が内視鏡によって剝離され除痛効果がえられたことが推察された。これらの症例の中から、除痛の得られた症例を提示する。

【症例】75歳女性 主訴：20年前からの腰痛、下肢痛、腰椎レ線写真やMRIで異常を認めなかったが、クモ膜下内視により脊髄腔の広範囲にクモ膜炎様所見と癒着が認められた。癒着性クモ膜炎と診断し、検査後、疼痛の軽快がみられ、退院した。

検査後の頭痛が15例に、軽度の発熱が4例にみられた。他に合併症はみられなかった。

12) 脊椎麻酔により出現した幻肢痛の1例

佐久間一弘・土田真奈美 (県立中央病院)
丸山 正則 (麻酔科)

85歳男性。50年前に交通事故にて右大腿部切断。以後断端部痛・幻肢痛の訴えはなかった。今回、前立腺癌の疑いにて睾丸摘出術を予定された。ネオベルカミンS 2.5